



カントウータ

Cantuta

No. 58



ボリビア東部チキタニアにあるサンホセ教会と独特な形のトボロチの木
写真提供：風景写真家 松井章氏

1. 日本人移住地訪問記（2）コロニア・サンファンとコロニア・オキナワを訪ねて 松井 章
2. ボリビア開拓記外伝—コロニアオキナワ 疾病・災害・差別を生き抜いた人々— 9 渡邊 英樹

一般社団法人日本ボリビア協会

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

1. 日本人移住地訪問記（2）

—コロニア・サンファンとコロニア・オキナワを訪ねて—

風景写真家 松井 章

<サンタクルスにて>

ボリビアに着く前、ペルーのアンデス山脈で1週間ほど、寒く薄い空気の高原で過ごしていました。霧が立ち込めるリマでは空港のトラブルで2日間ほど停滞した後に、ようやくサンタクルスに到着しました。6月の冬でしたが、湿度のある温かい空気に少しホッとしたのを覚えています。

サンタクルスは人口約190万人を擁するボリビア第二の都市です。第一の都市であるラパスがアンデス高原に位置するのに対して、サンタクルスはアマゾンの熱帯地方にあります。私はボリビアには何度も来ていましたが、そのほとんどがラパスを基点としたアンデス高原（アルティプレーノ）が目的地でした。

サンタクルスに着いて思ったことは、ここは別の国ではないかと思うほどの雰囲気の違いでしょう。アマゾンとはいえ、広大な“大アマゾン”から見れば、サンタクルスはアンデス山脈に近く、標高400mの高原にあります。6月は、夜になれば肌寒いほどの気温でした。夜行便であったので、到着時間は朝の5時。大変ありがたいことに、空港には日系2世の黒岩幸一さんが迎えに来てくれていました。打ち合わせで何度か連絡はしていたものの初めての顔合わせです。とはいえ、黒岩さんは日本人そのまま日本語を話すので、自分は南米にいることを一瞬忘れてしまいそうでした。朝からご自宅に案内していただき、お母様のお手製のヒレカツやご飯、お味噌汁をご馳走になりました。ペルーに

10日間ほど滞在していたので、日本食は体に染み渡るようで元気が出てきました。

黒岩幸一さんは、サンタクルスで日本食のシェフやアドバイザーを生業としています。この地で手に入る日本の食材は限られているので、地元の食材を生かして和を追及しています。足りないものは自分で作るという発想であり、ご自宅では日本酒の醸造をしていて、近いうちに商品化もするということでした。南米に根を下ろした日本人が持つ、当たり前のような逞しさや創意工夫の精神なのかもしれません。

サンタクルスに着いてまずお聞きしたのは、ボリビアの最新事情でした。特に、道路封鎖の状況は気になっていました。現在ボリビアでは政府への抗議デモの一環として、頻繁に道路の封鎖が行われることがあります。封鎖されてしまうと、物流が全て遮断されるので道路封鎖はとても大きな問題です。私が滞在中も道路封鎖のお話は何度か耳にしましたが、幸いにも私が移動する区間では問題はありませんでした。



写真1-1 牧場や畑が延々と続くサンファンへの道

<いよいよ日本人移住地へ>

朝、運転手のカルロスの車で、いよいよサンファン移住地へと出発です。サンタクルスのビルビル国際空港を過ぎて、30分もするとサンタ

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

クルスの都市圏を出て、左右はどこまでも畑や牧場です。ビルビル国際空港の“ビルビル”はグアラニー語で「平野」を意味するそうです。空港の周りの田園風景を見れば、まさしく“ビルビル”であることを理解できます。

この空港は、日本の円借款の供与（対中南米 ODA プロジェクトの一環）で 1983 年に開港しました。もともとは高原の大都市ラパスのエル・アルト国際空港がハブでした。しかし、標高 4070m の高地にあるので、大型機の離発着や保守管理に支障をきたす恐れがあり、この空港の建設が決まりました。建設には多くの日本企業も参加したそうです。現在では、外国からボリビアに入国するときには、半分以上のフライトがサンタクルスに入港するほどに、ビルビル国際空港はボリビアのハブとなっています。

話は逸れますが、サンタクルスから東にあるブラジル国境方面のチキタニア地方にも行きました。何度か道路と交差する線路を見たものです。サンタクルスとブラジルのコロンバを繋ぐ路線で、この線路の建設にも日本人が関わっていることを聞いて驚いたものです。

南米にいると親日的と感じることが多々あります。その根底にあるのは、日本人による長年の各地への貢献から生じた大きな信用なのだと思います。

<サンファン移住地>

サンタクルスから国道 4 号線を北上して、モンテロの町で道路は分岐します。左はコロニア・サンファン、右に行けばコロニア・オキナワです。左に曲がり、田園地帯や集落、ジャングルのような熱帯の木立を過ぎて、約 1 時間で

サンファン移住地に着きます。陽が高くなるにつれて気温は上がり、冬とはいえ蒸し暑くなっていました。今年で 69 周年を迎えるサンファン移住地は、現在は約 240 家族（約 750 人）の日系人が暮らしています。1955 年に始まる最初の入植は、「西川移民団」と呼ばれる移住者たち（14 家族 88 名）でした。日本で精糖業の企業経営をしていた西川利道が、ボリビアでの製糖に着目して企業として移民団を結成したのです。



写真 1-2 稲作が盛んなサンファン移住地入口

1956 年からは、（JICA の前身にあたる）海外移住事業団が移民事業を引き継ぎ、移住が本格化します。1969 年まで移住は続き、九州からの移民団を中心に、約 300 家族：約 1700 名がここに移住しました。

サンファン移住地とオキナワ移住地は、どちらも当初はアマゾンの原生林でした。道路も水道もインフラが何も無い荒地の開拓は困難を極め、日本へ引き揚げる人々や、サンタクルス、あるいはブラジル、アルゼンチンなどへ転住する人も後を絶ちませんでした。

苦しくも徐々に好転し始めたのは 1970 年代です。CAISY（サンファン農牧総合協同組合）の設立とともに機械化や大規模農業化を進めたことで、ようやく光が見え始めました。養鶏、大

豆、米、小麦や果樹の栽培や畜産業など、経営の複合化とともに飛躍的に発展することになりました。稲作の収穫は非常に大きく、質の高い米が生産されることから、「ポリビアの米どころ」として大きく販売を伸ばしています。



写真1-3 ソルゴー（イネ科）の畑

サンファン移住地に着くと、地元の池田潤平さんが迎えに来てくださいました。ランドクルーザーから姿を現した池田さんは、挨拶も早々にさっそく私を車に乗せて、移住地へ案内してくれました。車は、南米らしい大空の下、まっすぐな農道を走ります。この農道も移住者の方が自分で切り開いた道だそうです。途中、穂を実らせた畑で栽培していたのは、ソルゴーという飼料用の作物でした。

そして、大草原にある徳永直人さんの牧場へ着きました。徳永直人さんの牧場では、700頭もの牛を放牧しています。南米の牛は、牛舎で飼育されるのではなく、大草原で放牧されているので、赤肉と脂肪のバランスの取れた肉質が特徴です。ポリビア東部で飼育されている放牧牛はネロール種という品種で、背中にコブがある牛です。もともとはインドから持ち込まれた牛でブラジルやポリビア東部で飼育されています。

サンタクルスで食べたネロール種のステーキは、個人的には世界で一番美味しいのではと感じるほどでした。市内には、ネロール種のコブ専門の焼肉店もあり、サンタクルス人はかなり肉好きなのが分かります。

徳永さんの牧場もまた、そのネロール種の牛をたくさん放牧していました。貯め池を中心に放射状にいくつかの区画を作り、その区画ごとに牛を移動させて、バランス良く牧草を食べさせる仕組みです。私が着いたときに、ちょうど牛たちが土煙を上げて走ってきました。中心の貯め池に来ると、牛たちはそのまま隣の区画に移動していきました。自分たちで動いているようで、その賢さには驚きました。



写真1-4 徳永直人さんの牧場の牛

なんとも南米らしい雲が浮く空の下で働く日本人は、とても遅しく明るい方でした。

次は、サンファン日本ポリビア協会会長の日比野正靱さんのご自宅へ。とても大きな敷地のご自宅に通していただき、当時のお話をお聞きました。日比野さんは18歳の時に、この移住地がまだ原生林に覆われている時代にご両親とともに入植しました。船を降りて、ブラジルのサントス港からは、さらに鉄道で数日かけて、サンタクルスにたどり着きました。

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

この時、サンタクルスまで後少しという所で鉄道は止まってしまいます。リオ・グランデ川が大洪水に見舞われて鉄橋が破損していて鉄道が通れなくなってしまったからです。日比野さんは徒歩で恐る恐る橋を歩いて、女性たちは渡し船で命からがらこの川を渡ったそうです。

日本を出てサンファンに着くまでは数ヵ月もかかった末に、原生林の中で降ろされてとても驚いたそうです。海外移住事業団の集団移住で来たので、約 20 家族の荷物を積んだトラクターとけん引車両は、衣服や燃料など 1 トン以上を運んで来たそうです。



写真 1-5 日比野正靱さんのご家族

当時、すでに森は 3 ヘクタールほど伐採されてはいたものの、森は青々と茂り、おそらく威圧的であったことでしょう。森は焼き払おうとしても、根までは取れず開拓は苦労の連続でした。

低湿地を利用して、稲作を始め、さらに養鶏事業を始めてから、ようやく生活は安定したそうです。地平線まで畑が広がるように開拓するまで 8 年の月日が経ちました。そして、畑の彼方に、はじめてアンボロ国立公園の山々を望めたそうです。

移住をする前に日本では、現地の移住先には道路や学校もある土地だと聞いていたそうです。実際には、電気や水道、道路も家も無いとは思っていませんでした。多くの方が日本を発つ前に資産整理を済ませて希望とともにやって来たので、裏切られたという気持ちを抱いていたそうです。



写真 1-6 開拓当初の原生林が僅かに残る

開拓が始まると、他方では海外移住事業団を通して日本からの支援も始まりました。たとえば道路の建設などは移住地にとっても欠かせない支援となりました。苦労続きの末に、ようやく現在の幸せな生活を手に入れたのですが、移住地の今後の将来を考えると心配なことがあるとも言っていたのが印象的です。 <つづく>

記念切手の販売

松井章氏の撮影したボリビアの写真が日本・ボリビア外交関係樹立 110 周年及び日本人のボリビア移住 125 周年を記念する切手となって販売されました。

※郵便局ネットショップ

https://www.post.japanpost.jp/kitte_hagaki/stamp/frame/detail.php?id=3111

2. ボリビア開拓記外伝

コロニアオキナワ 疾病・災害・差別を生き抜いた人々 9

一般社団法人日本ボリビア協会
 相談役 渡邊 英樹

てんさい くる 天災に苦しむコロニアオキナワ

すいがい かん どうじはっせい 水害と干ばつが同時発生

いっぽう えんたい
 一方のコロニアオキナワの延滞は、
 てんさい おきなわ
 天災によるものであった。沖縄の
 ほんどふっき ねん がつ
 本土復帰は1972年5月だが、それ
 ねんはや ねん がつ
 より5年早い67年7月、コロニアオ
 りゅうきゅうせいふ りゅうきゅうかいがい
 キナワは琉球政府および琉球海外
 いじゅうこうしゃ かいがいいじゅうじぎょうだん いかん
 移住公社から、海外移住事業団に移管
 された。これは、コロニアオキナワの
 ひと じぶん おく だ
 人たちにとって、自分たちを送り出し
 せきにん ぎょうせいきかん
 た責任ある行政機関がなくなっ
 ったことを意味していた。サンフアン
 ちが ふまん あいて
 と違って不満をぶつける相手が
 なくなってしまったのである。1968年
 がつ にち かいがいいじゅうじぎょうだん
 2月5日に海外移住事業団サンタク
 しぶ じぎょうしょ だい
 ス支部のオキナワ事業所が第1コロ
 かいせつ か ご がつ
 ニアに開設されたが、その3日後の2月
 か だい まん
 8日に、第1コロニア(2万1800
 はんぶんいじょう めんせき
 畝)の半分以上の面積がリオ・グラン
 はんらん しんすい う
 デの氾濫によって浸水を受けた。か
 たい だい だい だいかん
 たや、第2、第3コロニアでは、大干ば
 つにより、ほとんどの農作物が収穫
 のうさくもつ しゅうかく
 できない事態となった。相異なる現象
 じたい そうい げんしょう
 が同時に発生した。

これを理解してもらうには説明を要す
 る。まず地形だが、オキナワ第1コロ
 ちか ちけい だい だいかん ほか
 ニア近くのリオ・グランデは護岸が高

くなく、高低差が1000分の1とい
 こうばい ぞうすい かわ むげん
 う勾配であるため増水すると川は無
 だこう けいろ
 限に蛇行してその経路も、よくつかめ
 みず
 ないまま水がどこからとも入ってき
 いじゅうち みず う にほん
 て移住地を水で埋めてしまう。日本の
 こうずい だくりゅう いっき なが おそ
 洪水のように濁流が一気に流れ襲う
 けではない。このため住民が避難す
 じゅうみん ひなん
 る時間的余裕はあり人的被害は少
 じかんてきよゆう じんてきひがい すく
 ない。しかし、至る所にできた水たまりは長
 いた ところ みず なが
 いこと引かず、引いた後も赤い泥が
 ひょうど おお つ
 表土を覆い尽くしてしまう。

コロニアオキナワより山脈に近いと
 さんみゃく ちか
 ころに位置するもう一つの日本人
 いち ひと にほんじん
 移住地サンフアンは降雨量が平均す
 いじゅうち こうりょう へいぎん
 ると、年間1850ミリと、日本の年間
 ねんかん にほん ねんかん
 降雨量とほぼ同じで安定している。
 こうりょう おな あんてい
 これに比べて、コロニアオキナワは5
 くら
 00~1100ミリと変動が激しく、そ
 へんどう げげ
 の中でも第3コロニアは、その降雨量
 なか だい
 が際立って少なく頻りに干ばつに見舞
 きわだ すく ひんぱん かん みま
 われた。湿気を含んだ雨雲が雨を降ら
 しっけ ふく あまぐも あめ ふ
 さずに移住地を通り過ぎてしまうから
 いじゅうち とお す
 だ。



写真2-1 無限に蛇行する大河リオグランデ
 (1970年筆者撮影)

ちなみに1966年~71年の間の
 ねん ねん あいだ
 オキナワ移住地のまったく雨の降ら
 いじゅうち あめ ふ
 なかった最大連続無降水日数は約140
 さいだいいれんぞくむこうすいにつすう やく
 日

にち かいがいいいじゅうじぎょうだんへん なんべい
 日である（海外移住事業団編「南米
 のうぎょうようらん あまくも
 農業要覧」）。ところがその雨雲がア
 ンデス山脈の冷たい空気に触れて
 たいりょう あめ やますそ ふ みず
 大量の雨を山裾に降らせる。すると水
 かさを増した水がリオ・グランデを下
 り、コロニアに洪水をもたらすのだ。
 これが第1コロニアに洪水をもたらし
 第2・3コロニアに干ばつを同時に引
 き起こすことになる。当然のことなが
 ら、移住地の将来に希望が持てなくな
 って、移住地を離れてサンタクルス市
 やブラジル、アルゼンチン、ペルー、
 べいこく にほん ち ち てんじゅう
 米国そして日本へと散り散りに転住し
 て行く人々が後を断たなくなった。



写真2-2 水害に見舞われる第1コロニアオ
 キナワ（1970年筆者撮影）

ふたいてん けつい ひとびと
不退転の決意の人々

そんな情況下にもかかわらず、「何
 が何でもここでやり遂げる」という
 かつこ けつい ひと とく
 確固たる決意の人たちがいた。特に、
 にゅうしょくいらい しどうてきたちば
 入植以来、指導的立場でコロニアを
 けん引してきた第1次移住者は4千人
 ちか しがんしゃ なか えら
 近くの志願者の中から選ばれたという
 いしき きょうりよく しえん きたい
 意識から、強力な支援など期待でき
 ない状態にもかかわらず、必死にコロ
 ニアを守り抜こうと努力していた。

にゅうしょくしゃ ぜんたい ていちゃくりつ
 入植者の全体の定着率が10%を
 したまわ たい だい じいみん だい じ
 下回るのに対し、第1次移民と第1次
 いみん よ よ かぞく だい じいみん
 移民の呼び寄せ家族がいた第4次移民
 の定着率だけは、50年後でも15%と
 ぐん ぬ
 群を抜いている。

その第1次移民と共に指導的役割を
 果たした第2次移民の宮古島出身者は
 コロニアを語る上で欠かせない存在
 だ。すでに故人となってしまう方が
 ほとんどだが、これらの人々がどうい
 う人であったかを紹介したい。まず
 あにや きょうだい と あ おきなわ
 安仁屋さん兄弟を取り上げたい。沖縄
 戦そしてうるま耕地といくつもの
 修羅場をくぐり抜けてきたはずなのに
 「何という奥ゆかしい気品を放つ兄弟
 なんだろう」というのが私の第
 いちいんしやう
 一印象だった。

あに すすむ おきなわしほんがっこう おきなわ
 兄の進さんは沖縄師範学校で沖縄
 おんがく ちち しやう さつきよくか
 音楽の父と称せられる作曲家であり
 きやういくしゃ みやらちやうほうせんせい おし
 教育者であった宮良長包先生の教え
 こ つま えいこ りゅうきやうだいがくそつぎやう
 子だ。妻の英子さんも琉球大学卒業
 で2人とも入植当初から「文武」の
 「文」の側面で移住地になくはなら
 ない人だった。弟の晶さんと共に、
 コロニアの記録、対外文書の作成、
 していきやういく ただい こうけん
 子弟教育などに多大な貢献をされた。
 あきら がくとしゅうだんそかい
 晶さんは、学徒集団疎開で、
 べいせんすいかん ぎやらいこうげき ちんぼつ やく
 米潜水艦の魚雷攻撃で沈没し、約15
 00人の犠牲者を出した「対馬丸」に
 へいそう りやうせん の こ
 並走していた僚船に乗り込んでいた。
 の ふね ぎやらい あ
 乗った船には魚雷が当たらなかったた
 めに難を免れ、熊本に疎開することが
 できた。戦後、疎開先から沖縄に戻っ
 てみると、家は戦争で焼かれ、跡地は
 こわ せんしゃ ざんがいがつ う つ
 壊れた戦車などの残骸物で埋め尽くさ

れていた。このため兄の進さんと共に
移住を決意したそうだ。

安仁屋家は首里王朝高官の末裔であ
るらしく、戦前の家は首里城の下にあ
り1年間の薪は自分の敷地内にある
樹木で賄えたとのことだった。兄弟
ともにサンタクルス市へ移り、海外
移住事業団サンタクルス支部で働いて
いたが、常にコロニアの「智」の役割
とアンテナ役を果たしていた。



写真2-3 左から安仁屋進、友利金三郎と筆者 (1970年)

進さんの息子は翻訳業とイベント
企画業を営み、長女の井上悦子さん
はボリビア沖縄県人会の事務局長と
して共にサンタクルスで活躍してい
る。晶さんの息子さんの1人はサンパ
ウロ大学を卒業後、日本の国立大学で
学び、大学教授となった。現在は
物理学者として世界の学会に出席して
おり、学問の世界で活躍している。
安仁屋家の末裔はDNAを引き継ぎ、
立派に羽ばたいている。

長嶺オスカル為泰さんは10歳の
時、家族と共に第1次移民としてうる
ま耕地に入植した。姉は安仁屋進さ
んの妻英子さんだ。長嶺さんは劣悪な

環境の中で育ったにもかかわらず、レ
ネ・モレーノ国立大学の戦後移民第1
号の卒業生となった。ブラジル銀行サ
ンタクルス支店に採用され、その後は
ブラジル銀行東京支店開設に伴い
東京に転勤となった。世界ウチナン
チュ・ビジネス・ネットワーク (WU
B) の会長も務められた。

幸地広さんは移居前、学校の先生だ
った。全町の82%の土地が米軍によ
って接収された嘉手納町の出身であ
る。終戦時には、町民の全ての人が、
昔の町の18%の土地に住まわなけれ
ばならなかった無念さを語ることはな
かったが、有毒で知られ、毒抜きをし
なければ食べられないソテツの実であ
るが「ソテツの実さえあれば、ウチナ
ンチュは生きられる」という口癖
が、その壮絶な体験を物語っていた。

常に冷静沈着で客観的観察がする
べく事業手腕もあり、自身の農業もし
っかりと築き上げた。コロニアオキナ
ワ農牧総合協同組合 (CAICO)
創設期には理事兼支配人として、そし
てその後も、CAICO組合長等々、
常にコロニアをけん引され続けた功勞
者だ。

オキナワ日本ボリビア協会の初代と
2代目の会長は、第2次移民の宮古島
の出身者だった。初代会長の当真
徳善さんは、移居前は琉球政府の
宮古支庁に勤めていた。奥さまの芳子
さんは平良市でブティックを経営され
ていたそうだ。6人の子供さんがおら
れたと思う。全て女兒で、芳子さんは

第1コロニアの公務に多忙だった徳善
 さんを毎日オートバイで送迎し、自分
 の農地においては、現地の農業労働者
 を使って農業経営を女手一つでやって
 おられた。

2代目会長の友利金三郎さんは、元
 陸軍中尉で、やはり移住前は宮古支庁
 の職員だった。第2コロニアの中心
 地を自らの手で切り開いた。

根間玄正さんは宮古島農林高校の
 教諭だった。長男の玄真さんは走り
 高跳びで活躍したスポーツマンで、
 戦後移民で初の弁護士となった。こう
 した人々に共通するのは「沖縄の青年
 たちのために未来のある新天地を築こ
 う」という構想に共鳴し、自らがそ
 れに身を投じて構想の実現を目指し、
 当初抱いた夢を決して諦めない使命感
 と勇氣を持っていたということだ。

そして、最後は宮城徳昌さんだ。

こんな不思議な人を、今に至るまで
 見たことがない。徳昌さんは「自分は
 もうかつて、もうからなくても作物
 に向き合って農業をしているのが
 一番、性に合っている」というほど
 自然と農業を愛していた。人を愛し、
 私利私欲がまったくない。

強力に先導するというよりも、
 人々に「この人が言うのなら仕方な
 い」と納得させてしまう不思議な人だ
 った。混乱期の移住地をまとめるには
 この人以外にないと推され、CAICO
 の初代組合長に就任した。

若造の私に「移住地内のゴタゴタ
 は、我々が責任をもって収めるので、

どうかCAICOをボリビア有数の
 農協に育ててください」と最初から
 全幅の信頼を寄せてくれた。ほとんど
 のCAICOの役員が、私が出向し
 た時に、これで人手が増えたと組合の
 人員の削減を主張したのに対し、
 宮城組合長は



写真2-4 CAICO役員と会食。左から山城保徳、友利金三郎、西野世界オキナワ事業所長、筆者、幸地広理事兼支配人、金城達巴監事長、篤進オキナワ中央病院院長（1971年）

「ワタナベさんに最低5人は付けた
 い」と言って譲らなかった。CAICO
 の事業に携わらせることによって、
 コロニアオキナワの将来を担う人材の
 育成を図ろうとしたのだ。

そして、久高将行、平良賢治、根間
 玄真、幸地哲雄、スサーナ当山さんら
 優秀な若者を付けてくれたのである。
 宮城組合長の人選は正しかった。

最初はできないことの言い訳ばかり
 であった若者たちがみるみる進化して
 いった。将行さんにはアメリカのメン
 フィスで勉強してもらって綿花格付士
 の資格を取ってもらった。後にCAI
 COの支配人になった。賢治さんは
 組合経理を、玄真さん、哲雄さんは

くみあけいえい にほん かいがい
 組合経営を、それぞれ日本の海外
 いじゅうしゃしていけんしゅうせいなど りょう
 移住者子弟研修制度等を利用して
 べんきょう ほけん
 勉強してもらうように派遣した。その
 ご たいらげんじ じぎょうか ねま
 後、平良賢治さんは事業家に、根間
 げんしん べんごし こうちてつお
 玄真さんは弁護士に、幸地哲雄さんは
 けいえい
 経営コンサルタントとなり、スサーナ
 さんはこうにんかいけいし
 さんは公認会計士となった。

この頃は南米各地の日本人移住地の
 さんじょう つた きみん ひょうげん
 惨状を伝え「棄民」という表現で
 にほんせいふ いじゅうせいさく しっばい つた
 日本政府の移住政策の失敗を伝えよう
 とするマスコミの取材が再三あった。
 なんべいかくち いじゅうち
 南米各地の移住地は、それによって
 ちゅうい かんき しえん えんじょ よさん
 注意が喚起されて、支援・援助の予算
 がつけられるのではないかと歓迎し
 た。

ところが、みやぎくみあいちょう ちが
 ところが、宮城組合長だけは違っ
 いた。それらの記者に対して「我々は
 きぼう す さんじょう
 まだ希望を捨てていない。ただ惨状を
 つた しゅざい にほん しんせき
 伝えるだけの取材は、日本にいる親戚
 えんじや しんばい
 縁者にいたずらに心配かけるだけで、
 なん い み しゅざい ことわ
 何の意味もない」と取材を断った。す
 ひと おも いっけん のうか ぼくとつ
 ごい人だと思った。一見、農家の朴訥
 こうこうや み みやぎくみあいちょう
 な好々爺に見える宮城組合長である
 ひか どうさつりよく ととききおどろ
 が、キラリと光る洞察力に時々驚か
 われわれ ぎん とくしゅう
 され、我々は「いぶし銀の徳昌さん」
 よ おきなわけんじん びとく すべ
 と呼んだ。沖縄県人の美德の全てを
 たいげん かた おも とくしゅう
 体現している方と思った。徳昌さんと
 いっしょ せいじゃ とも あゆ
 一緒にいると「聖者と共に歩んでい
 る」と本当に思うことがあった。

「自分はこの骨を埋めるんだ」とい
 びどう いさぎよ かん
 う微動だにしない潔さを感じさせら
 れた。このように先発隊として選ばれ
 ひとびと たいりよく ちりよく かね そな
 た人々は、体力と智力を兼ね備え、
 しきけん ひい ひと
 識見に秀でた人たちがばかりであった。

しかし、げんご ふうぞく しゅうかん こと
 しかし、言語・風俗・習慣の異なる
 しゃかい てきおうりよく よき こんなん た
 社会への適応力、予期せぬ困難に立ち
 む ゆうき にんたいりよく いきょう なか おそ
 向かう勇気と忍耐力、異郷の中で襲つ
 てくるぼうきょう ねん ふっしよく こっきしん
 てくる望郷の念を払拭する克己心
 どうとうかいがいじゅう ひつよう そよう そな
 等々海外移住に必要な素養を備えてい
 ひとびと げんじつ
 た人々にとってさえ、ボリビアの現実
 きび
 は厳しかった。(つづく)



写真2-5 屋良知事(中央)を案内する宮城徳昌CAICO組合長(左)と筆者(右)



琉球新報社のご厚意で転載させていただきます。
 ご関心を持たれた方は下記琉球新報社URLをご覧ください。

<https://store.ryukyushimpo.jp>

★スペイン語版が発刊されました★

本誌で『ボリビア開拓記外伝』（琉球新報社 1900円+税）の小分けの連載（全漢字ルビ付き）をしておりますが、そのスペイン語訳本『BOLIVIA REGISTRO DE UNA HISTORIA PARALERA』が、明石書店(2500円+税)より出版されました。



訳者の大城ロクサーナさんと筆者

会報誌「カントウータ」の名称について

当協会会報誌「カントウータ」はボリビアの国花であるカントウータにちなんでいます。カントウータ(学名 Cantua Buxifolia) は、アンデス高地で見られる顕花植物で、大きなものは、高さ4メートルに達します。

ハチドリが好む、細長い管状の花には、一色のもの(赤やピンク、黄色)の他、「三色カントウータ La Kantuta tricolor」として知られる種があります。これは赤い花びら、黄色い花筒、緑の萼を持ち、ボリビア国旗の赤・黄・緑を思わせることから、高地を代表する国花となっています。誰にも愛されるこの花を、当協会会報誌の名前にしました。



La Kantuta tricolor

ペルー他のアンデス地域ではカントウータを Cantuta と表記していますが、ボリビアではアイマラ語、ケチュア語で Kantuta がオフィシャルな表記とされており、2009年に制定された現行の憲法第6条2項において、国花を kantuta と定めていることから、これまで「Cantuta」と表記していた会報誌のタイトルを今般「Kantuta」と改めることにしました。



庭に咲くカントウータとハチドリ (撮影: Athenaia)

もう一つのボリビアの国花は、パトゥフー Patujú: 学名 Heliconia Rostrata です。

2024年協会活動について

1月13日 新春交流会

「Y's新宿エステック情報ビル」にて開催。最初に椿会長から「ボリビアの今: 政治、経済そして社会はどうなっているか?」とのテーマでボリビアの現状につき講演。立食形式の懇親会に移行し、途中、会員ご夫妻のフォルクローレグループ「カパック・ニャン」によるフォルクローレ演奏もあり参集した30名程の参加者に有意義な懇親の時間を過ごしていただいた。

2月28日 ラテンアメリカ協会の新春懇談会

椿秀洋会長、上崎雅也常務理事が出席。小淵優子議員はじめ5名の国会議員、全ての中南米の駐日大使・臨時代理大使、主な民間企業の代表、ラ米関係団体等、108名が参加し、情報交換を行った。

3月1日 ラテンアメリカ関連団体連絡会

リモートにて開催され、上崎雅也常務理事が出席し情報交換を行った。

3月26日 令和5年度第3回理事会

対面及びZoomによるハイブリット式で開催し 令和5年度の事業報告、決算報告(暫定)及び令和6年度の事業計画(案)及び予算(案)を承認した。

5月27日 令和6年度第1回理事会

電磁的方式にて開催。令和5年度事業報告、決算報告及び監査報告承認の件や令和6年度事業計画及び収支予算書報告の件などを書面決議にて実施・承認した。

6月1日 令和6年度定時総会

千代田区立九段生涯学習館にてハイブリッド方式で開催。15名(対面:14名、リモート:1名)が出席し、令和5年度事業報告、決算報告及び監査報告承認の件や令和6年度事業計画及び収支予算書報告の件などを審議し、全ての議案の賛成を得て承認された。

同日 令和6年度第2回理事会

総会に引き続いて開催。12名の理事・監事が出席し、職務分担について審議・承認した。

6月7日 ラテンアメリカ関連団体連絡会

リモートにて開催され、細萱恵子常務理事が出席し情報交換を行った。

6月25日 ラテンアメリカ協会定時総会

対面・リモート方式にて開催され、上崎雅也常務理事が出席した。

8月3~31日 当協会会員・写真家松井章氏の写真展「ボリビア: 東部オリエンテ地方と日本人移住地」

麹町の Instituto Cervantes で開催。28日には、同会場にて駐日ボリビア大使館主催で、「日本人移住がボリビアの発展に与えた影響」についての対話セッションが開催され、ボリビアからの日系人留学生3名と元ラパス日本人会会長、外務省南米課長、JICA中南米部長等の関係者の参加を得た。

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

8月17日 オキナワ移住地入植70周年記念式典

大川裕司常務理事が出席。式典に先立ち慰霊祭が行われ、参加者各位は黙とう、焼香で移住地の苦難の歴史や先達の功績に思いを寄せた。

8月20日 ボリビア大使館訪問

椿秀洋会長と上崎雅也常務理事が芝公園のボリビア大使館を訪問し、ナタリア・サラサール臨時代理大使と情報交換を行った。

9月6日 ラテンアメリカ関連団体連絡会

リモートにて開催され、上崎雅也常務理事が出席し情報交換を行った。

9月17日 日本・ボリビア外交関係樹立110周年及び日本人のボリビア移住125周年の記念切手発行

記念切手のモチーフとなった写真は、当協会会員でもある風景写真家の松井章氏が撮影したもので、現地を訪れた様子などを当協会会報誌「カントゥータ」にも寄稿いただいた。

9月21日 和洋九段女子中学校にて出張講義

椿秀洋会長が1年生全員70名を対象にボリビアについての講演を実施した。同校では、文化祭に向けて各クラスで興味のある国を調べていたところ、或るクラスでウユニ塩湖の美しい風景に生徒たちが関心を寄せ、ボリビアについて調べようという事になり、担任の先生から協力の要請を受けたもの。講演は90分間と中学生には長めながら、皆、メモを取りながら熱心に聴いていただいた。

10月27日 「南米料理を楽しむ会」

千代田区立スポーツセンターにて開催。日系ボリビア人夫妻を講師に迎え、21名の参加者と共にオリエンテ地方の伝統的家庭料理のマハディート・デ・チャルケとアサディート・コロラドの調理に挑戦し、シンガニやワインと併せながら、食事と懇談を楽しんだ。

12月6日 ラテンアメリカ関連団体連絡会&懇親会

対面にて開催され、細萱恵子常務理事が出席し情報交換を行った。

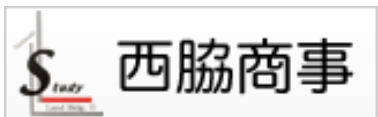
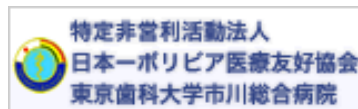
12月20日 年末交流会（講演会+懇親会）

銀座「Salon de Juliet サロンドジュリエ」にて。今年2024年は日本・ボリビア外交関係樹立110周年及び日本人のボリビア移住125周年に当たり、駐日ボリビア大使館 ナタリア・サラサール臨時代理大使と、外務省中南米局 塚本康弘南米課長にご講演いただいた。引き続き、最近発足したJICAボリビアOV会より団体紹介が行われた後、懇親会に移行。昨年度に引き続き、今年2名から3名へとパワーアップしたフォルクローレグループ「カバック・ニャン」によるラテンアメリカ音楽も楽しみながら、ビッフェ形式の会食にて40名ほどの参加者の親睦を深めた。

編集委員

椿 秀洋 細萱 恵子 大川 裕司

◎日本ボリビア協会維持会員一覧◎



Copyright© 2002-2025

一般社団法人日本ボリビア協会
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)